

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 29 号

平成 16 年 9 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

南原繁著作集第 10 巻より(2)

歴史は誰がつくるか(1)

(昭和 41 年 5 月 22 日 香川県立三本松高等学校創立 65 周年記念講演)

私どもの世代は不幸にして、日本の歴史を敗戦に導いた。この戦争をくいとめ得なかった。これはわれわれ世代の国民全体の責任であります。われわれはその敗戦日本を諸君に伝えたわけです。従ってこれからの日本を興すということは、なかんずくここにご出席のあなたがたの世代、諸君のジェネレーションの大きな責任であると思います。諸君はまさに 21 世紀に生きる人であり、そして新しい世紀を作る人であるのです。

それならば、これからあなたがたはどうすればいいのか、諸君の一人一人が何をなすべきかということ、これが問題になってくるのです。私は中学時代に、確か四年か五年であったと思いますが、英語の読本にナショナル・リーダーというのを使いました。その中に今も鮮やかに記憶している一章があります。それは確かこういう意味でありました。今諸君の前に一挺の鑿(のみ)、彫刻に用いるのみと

大きな大理石のかたまりがあります。諸君はこののみとこの大理石を用いて、諸君の欲するいかなる像をも刻むことができるという筋

のもので、これは今から考えてみますと、おそらくスマイルズの『セルフ・ヘルプ』の一節の抜粋であったと思うのです。実際現在の諸君は、まさにこうした状態に置かれているのです。自分の前に1挺ののみと大理石の大塊があるのです。それをおのおのの才能と環境に応じて、自分の欲するままの像を諸君は作る事ができる。またそれを作る義務があると思うのです。それならばこれから諸君は何をなすべきか、いかなる像を刻むか、それを今ここで、ともに考えて見ましょう。

(このあと、1 . 自然科学 2 . 文学、文芸 3 . 政治、行政 4 . 実業界、経済界 の分野で活躍した三本松高校の先輩を紹介したあとで、次のように述べられる。)

歴史は誰がつくるか（２）

ここで申したいことは、誰でもがなろうと思えば必ずなれるものがあるということです。しかもそれは、以上例を挙げたいろいろな種類の人々の生き方に決して劣らない、榮譽ある、立派な生涯であるのです。それは何か。私の思いますのに、人間として誠実で、勤勉、そうしていつでも正義に味方する人になるということです。誠実ということ、これは人間の至宝であります。そういう「まこと」の人はどんな仕事でも、たとえ世の中に隠れた仕事でも、あるいは人のしない仕事でも、甘んじて自分の天職としてこれに全力を注ぐ忠実勤勉な人でありましょう。それでいてちゃんと、正義と不正義を判然と区別し、イエスをイエスと言ひ、ノーをノーと言ひする勇氣を持つ人でなければなりません。そういう「まこと」と「正義」と「勤勉」の三つが重要です。たとえ先程あげましたような、立派な学者になっても、芸術家になっても、また実業家になりまして、これがないならばその生涯は空虚であります。いな、空しいばかりではなく、かえって社会に害毒を流すことになります。才能があるだけ、それだけ害毒は大きいといわねばなりません。そういう実例は世間にいくらでもあります。

歴史は誰がつくるか（3）

人類の歴史は、偉人、英雄といったごとき、そういう少数の選ばれた者が作るものでないはないのです。その基礎において必ずや一人一人、誠実にして勤勉、正義に味方する国民大衆によって担われ、支えられてこそ、はじめてその国の揺るぎない、悔いのない、真の歴史が創られると思います。それは日本の最近の歴史を見てもわかるし、また長い人類の歴史において、少数の人のいわゆる専制政治から、封建政治へ、さらに民衆の自由の政治へと発展してきたことをみても、了解されることです。歴史は初めに申しましたように、一方においてはその過去と伝統の上に築かれるもので、これと切り離して現在と未来があるわけではありません。けれども同時に、歴史は単に過去によって縛られた、いわゆる宿命やまたは運命ではありません。人間の絶えざる努力、不断の創造、日々新たな建設、これこそ歴史であると思うのです。

歴史は誰がつくるか

(4)

あなた方は高等学校の生徒である。すなわち大学に直結して基礎教育と、同時に自由な教養を身につけること、それがこの高等学校で学ぶ諸君の課題であります。だから3年という諸君の修業年限の間に、まず…基礎知識の修得に努力すること、そのためにはまず教科書をしっかり勉強して理解すること、これが一番肝心であります。

さらに新しい高等学校に於いて重要なことは、そういう基礎教育のほかに教養を身につけるということ、そしてその教養を通してめいめいの人間を今から作り上げるといったことであると思います。私が先程申した誠実、まことというの、この教養を通して学ぶことが出来ます。われわれはまず自分自身に対して誠実でありたい。そういう意味におきましては、この高等学校時代には単に教科書だけでなしに、何か良い書物を見出すべきです。そのために、またよい友達を作る事が大切です。必ずしもたくさんの本を読む必要はありません。本当に自分の心から共鳴するような、また諸君の全精神を高めるような、そういう書物を選びなさい。そのためには少数の友人とともに語り、ともに論じ、話し合うことが必要であります。そうした良書は反復熟読するのがよろしい。

歴史は誰がつくるか（５）

私が第一高等学校の生徒であった当時の校長は、新渡戸稲造先生でありました。…先生が一番好んだ思想家は、１９世紀のイギリスの思想家、トーマス・カーライルでありました。諸君などはもはやその書物を読まれないかもしれませんが、これは読んでいい本で、いつまでも残る書物です。そのカーライルの書物のうちでも特に『サター・リザータス』という本があります。これを『衣装哲学』と訳して日本でもこの訳本が２種類もありましょう。これを新渡戸先生は学生時代から愛読して１７回か１８回か読んだということでありました。…こうしてカーライルに打ちこんだ。それだから先生は英文においても、カーライルに影響されたなかなか力強い文章を書いたのです。これは一つの例であります。そういう良い書物を見出すこと、良い少数の友人を作るということ、これは人生における一つの

「^{エンカウンター}出会い」であります。あなたがたの生涯において、思わないとき

に、思わぬ人にめぐり合う、また思わぬ良書にめぐりあうことがある。そしてこれがその人の一生涯を決定的ならしめることがあります。そうして、その書物や友人が、われわれの生涯を通じて変らぬよい伴侶や嚮導者となることがあるものです。

歴史は誰がつくるか（6）

かようにして新しい高等学校時代は、諸君が自分自身を深め、耕すことによって、はじめて人生問題を考え、そうしておそらくはこの時代に、諸君のそれぞれ、これから先の生涯を歩む道も定まるであります。しかし、申しておきますけれど、その道は必ずしも平々坦々たるなだらかな道ではないでしょう。そのうちには、人生に対する疑惑や疑問も起こりましょう。ついには自分や人間に対する嫌悪や失望も、起こることがあります。そういういろいろな過程も通りましょう。そのときはじめて、人間を越えた何か絶対的なもの、すなわち神とか仏とかいう問題に対決することになるのです。しかしまじめにその苦闘を貫くことによってはじめて、めいめいが自分ながらの人生や世界に対する態度を体得するであります。そしてそのときに、然りを然りとし、否を否とする、真理に対する勇気も、そこから湧くのだと思います。そういう意味で高等学校時代は、われわれの時代をかえりみても、人間をつくるきわめて大切な時期であります。

歴史は誰がつくるか（ 7 ）

ここで、この学校には全然関係がありませんが、もう一人私の親友を諸君にご紹介したい。これは、私が大川中学を卒業して、…現在の東大の教養学部にあたります第一高等学校に入学したときに、同じ組にいた一人の青年であります。

（彼は、京都府の丹後の出身、明治学院中学部の卒業、内村鑑三について、人生の解決を得た。東大法科大学入学、岡山の第六高等学校の教師、のち第一高等学校教授、法学通論、語学を教えた。）

その名は三谷隆正。この三谷隆正君が若いときに小さな書物を書いた。それは彼の処女作であり、『信仰の論理』という書物であります。その書物の結語で彼は次のような意味のことを言っています。「私の一生の大野心、大きなアンビションは、自己に死ぬことである。自己に死んで、そうして他者、自分でないほかの者、他者の裡によみがえって、他人に仕えることである。これ以外の野心を自分は持ちたくない」と。自己でない他者と申せば、つきつめて考えれば絶対他者、神であります。自己を捨てて神にささげ、それによって他人を愛し、他人のために仕えるという絶対愛他主義を説いた。彼は実際そのとおり実行して一生を送りました。

歴史は誰がつくるか（ 8 ）

彼（三谷隆正君）は確かに学生、生徒としても模範的でありましたが、同時に教師としても、高等学校の教師として、きわめて理想的な人間だったと思います。

そこで思いますことは、良い生徒、良い学生を育成し、導くのは、やはり良き先生、良き教師をおいては他にないということです。まず教師自らが教養を高めて、人間として愛情と正義心に富み、そして学問と知識に対する熱情を持った人でなければならぬと思うのです。そういう教師と生徒、先生と学生との間の交流、交わり、それが本当の学園であり、学校であると思います。私の場合、いちいちここでお名前をあげませんが、昔の大川中学時代、良き先生に恵まれました。・・・また第一高等学校におきましては、先ほど申した新渡戸稲造先生をはじめ、多くの教授から感化を受けました。現在の私に少しでも世の中にお役に立つことがあるとしますならば、中学時代から、いや小学校時代からの、これらの諸先生のたまものであると、私はかたく信じております。そういう師弟のつながり、精神の交互関係、これこそがどんな立派な近代的校舎にも勝る、本当の学校の生命であり、いのちであると信じます。

南 原 繁

彼は白砂青松の瀬戸内海の
片田舎に生まれた子、
国民が最大の困難に直面し
そのために備えられた人を要したとき、
神と自然は、多くの人の指導者として
彼を形成していった。
彼の心は、苦難の中にあってもなお
獅子のように勇気にあふれている。
彼は、明日の計画を立てる忍耐をもち、
今日の義務をなす勇気を持つ。

必要なとき、備えられた人が与えられた
困難を克服するために強くされた人が！
想像を絶する困難な中に
彼は巖のようにしっかりと立っていた。
彼は国民が直面した苦難の時に選ばれた。
彼は教育者であり、また指揮者であった。

彼の構想力と行動力は鉄のようであった。
彼は日本の再建を目指して、明晰な頭脳と
力強い雄弁で人々を励まし、導いた。
そしていつも謙遜で
周りの人々と共同体を作った。

歳月は矢のように飛び去る、
数十年が一瞬の間に過ぎてゆく。

その中であって、このように
勇気を持って立ち向かった人だけが長く記憶されて
いつの世にもある困難な問題に挑戦している。
英雄に等しい性質を持つ彼の名を
大空に書き記し、
輝かしい、汚れのない
卓越した不朽の名として
記録しなければならない。

山口 周三

(この詩は、カウマン夫人の「山頂を目指して」の7月19日のところの出ていたマーガレット・E・サングスターの「エブラハム・リンカン」という詩を、下敷きにして、改作したものであります。)